

女友達

ナカノリエ

正直なところ、この歳になって友達を失くすのは手痛いなという気持ちと、それも仕方ないかという気持ちと、陽子には両方あった。

「女性同士の付き合いは難しいのよ、女の人的人生は結婚相手に大きく変わってしまうから。」
いつだったか、母からそう言われた。

悔しいけれどその通りなのかも知れない。

「女性同士の付き合いは難しい。女の人的人生は、結婚するかしないか、結婚相手がどんな人か、子どもがいるかいないか、いろんな要素に振り回されるな。」
そんな風にため息をついた。

本当の友達だったらこんなことないだろうなんて娘みたいなことを思わなくもないけれど、お互いにそれぞれの人生が大切で、それに沿った人間関係になっていくのも無理はない。

陽子は友達よりも少し早く結婚した。

短大を卒業して、就職した会社で知り合った二つ年上の人が夫となった。

わずか1年半の社会人生活だった。

取り立ててそのことに不満はなかった。

そういうものだと思っていたし、それがそうなかっただけだ。

夫も尊敬できたし、結婚して1年ほどで上の子が生まれ、それから2年もしないうちに下の子が生まれた。

社宅住まいは3年ほどして、下北沢の夫の実家の土地に家を建てた。

賑やかな駅前から少し歩くと静かな住宅街に入る。

同居ではない、陽子はそう思ったが、夫の親にとっては我が子には変わらない。

我が子が我が家に我が孫を連れて帰って来たのだ。

だとしたら、いつまでも他人の顔をしていられるものだろうか？

陽子はお母さん、お母さんと何でも頼りにするようになった。

お母さんは素直で頭の良い人だった。

女の子のいなかった家に、娘が出来たわねと花が咲いたように喜んだ。

とはいえ、子育てに追われなければ、寝込んでいたかもしれない。

我ながらあの時期はよくやったなと思う。

専業主婦のまま、子どもたちとともに過ごした。

時々、教育費もかかるし働いた方がいいんじゃないかしらと思ったけれど、

夫はあまりいい顔をしなかったし、お母さんも

「陽子ちゃんも好きなことをしていればいいのよ、習い事でもしたら？」

と、ことあるごとに言った。

まあ、それならばと、素直に習い事に精を出した。

区の広報は隅々まで目を通し、学校の講座やPTAにも積極的に参加した。

趣味も作品も道具も、数だけは増えた。

そんな陽子はいつも孤独だった。

やっかみの対象になるのだ。

陽子は鈍い方だったけれども、行き過ぎた嫉妬で火傷をせずに居られるほどではなかった。

だんだんと、より鈍く鈍くなって、寛容さも度を越して、どうでもよくなって、気がつくともろく孤独になっていた。

でもいいのだ。

孤立したわけではない。

娘のように迎えられた陽子にも悩みはあった。

夫も子どもたちも、お母さんの料理が好きだった。

陽子は料理が好きだったけれど、いつからか手を抜くことばかり考えるようになっていた。

はりきって拵えたものも、テーブルに並べた途端、色合いを失くすのだ。
力の抜ける感触は耐え難いものだった。

陽子はお母さんの目を盗んで、ランチに興じた。
友達と食べるわけでもなくたった一人で。
罪悪感とともにある哀しい時間でもあった。

ある日、夫から
「家計は陽子に任せてある。陽子の好きなようにしたらいい。ただ僕は外食は特別な時に家族とするものだと思うよ。」
と指摘された。

こめかみの辺りから気持ちの悪い汗が出るような感覚を覚えた。
味もしないランチ、底の見えない孤独感。
結婚して初めて陽子は寝込んだ。
子どもたちは高校生になっていた。
一週間天井を見つめていた。

夫や子どもたちの身の回りの世話をしていただいて、とお母さんにお礼を言うと、意外な答えが返ってきた。
「陽子ちゃん、あの子たち、みんな自分たちでやったのよ。私には何もさせなかったの。」

食事の支度は、夫がしていたという。
そういえば夫は大学4年間寮生活で、料理が得意だった。
社宅住まいの間は時々、腕を振ってくれた。
洗濯や掃除は子どもたちがしていたらしい。
お弁当は夫が握ったおにぎり子どもたちが簡単なものを詰めて持って行っていたらしい。

「知らなかったでしょう？でも子どもたちは見ていたのよ、毎日あなたが何をしていたのか。洗濯物を見てごらんなさい、畳み方が私のやり方じゃなくて、ちゃんと陽子ちゃんと同じ、きちんとタンスに入っているはずよ。」
そういえばタオルの畳み方がいつも通り、いや、いつもより少し丁寧に畳んである。
気がつくとはらハラと涙がこぼれていた。

「陽子ちゃん、どんなにしたって、あなたはお嫁さんだから、私が娘だと思っても、あなたが私をお母さんと慕ってくれても、大変だったと思うのよ。私は自分の生活は自分の思うようにして来たし、なるべくあなたたちの生活に入り込まないようと思いつつも、きっとそうではなかったと思うのよね。あの子たちはきっとわかっていたと思うの、言葉にしなくても。そしてどうやってあなたを思いやればいいか、わからなかったかも知れない。あなたは縁の下で力持ちなんかじゃなくて、自分の人生の主役なのよ。あの子たちはあなたにそれに気づいて欲しかったんじゃないかしら。私もあなたの人生を応援したい。あなたがそうしてくれたように。みんな、そうおもっているんじゃないかしら？」
陽子はお母さんに抱きつくようにして泣いていた。

そうか、私は大変だったのか。
そして、みんなそれを知っていたのか。
気づかないように、気づかないようにしていたのは私だったのか。

「ただいま。ママもう大丈夫なの？」
高校一年生になった、なおが言った。
中学から続けている部活のテニスでまだ夏も前だというのに日焼けしている。
「もう大丈夫よ。お腹減ったでしょう？おやつは？」
「私が作る、ホットケーキ。ママとおばあちゃんは待ってて。」

娘の焼いたホットケーキはどこか白っぽくて平べったく、夫やお母さんの作るあの黄色くてふっくらとしたホットケーキとは似ても似つかない、陽子のホットケーキそっくりだった。

「おいしいわ」

おいしい、見かけはともかく、これが娘の作ってくれたホットケーキ、こんなにおいしいものはない。

私に似たところもあるんだと、心が少し弾んだ。